

グループホームの運営に取り組んだ 訪問看護師たちの記録

〔評者〕

工藤 禎子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

『訪問看護と介護』の読者には、宮崎和加子さんのファンや、何らかの影響を受けた人が少なくないと思われます。そういう私も1993年に『訪問看護ステーション』（医学書院）を手にした際に、新しい看護の拠点を作っていくノウハウを、こんなにわかりやすく、面白く、しかも看護の本質をきちんと伝えられる宮崎さんって、なんて素敵なんだろう、と惹きつけられて息もつかずに読んだ1人です。

あれから10年。その宮崎さんが、同じく訪問看護に携わっていた日沼さんと、今はグループホームに取り組んでいるというではありませんか。宮崎さんが、グループホームの開設から2年の実践を記したのが、この『生き返る痴呆老人——グループホーム“福さん家”での暮らしと実践』です。

内容は、前半は、宮崎さんたちがグループホームに挑戦したいと思った理由、“福さん家”の概要、“福さん家”の1日、開設までに準備したことが書かれています。

訪問看護のプロパーとして活躍されてきた宮崎さんにとって、痴呆老人のケアにはどうしても不全感が残っていたといいます。痴呆老人の本質的なケアに、初心にかえて挑戦してみようという思いで、職員配置、建築、入居者募集などを意図的に形にしていこうプロセスにうなずかれます。また、開設に当たって、ホームを地域の住民の方々に理解し



生き返る痴呆老人

グループホーム「福さん家」での
暮らしと実践

宮崎和加子・日沼文江 著

四六並 264 ページ

定価 1,470 円(本体 1,400 円+税 5%)
筑摩書房

てもらふ大切さが述べられ、地域の方々からの理解は痴呆の人たちが地域で普通に生きていくために欠かせないものであり、痴呆があっても住みやすい街づくりの一步になるというくだりは、グループホームのあり方の大切なポイントだと思います。

「開設後のハブニングと試行錯誤」「日々の暮らし」「スタッフのかかわり」の章では、入居者さんたちの様子や職員のかかわりが描かれ、自分も“福さん家”ワールドの一員になったような気分で楽しめます。

10数年前に痴呆専門棟に勤め、理想と現実のギャップに直面した私は本書により、グループホームという形ならば日課や献立を決めず、入居

者の方々が日々普通に暮らし、職員はそれを黒子としてサポートするという理想の形が実現できるのだと、わが国の痴呆老人のケアがここまでのきたのだと、改めて感慨を覚えました。

最後の「グループホームの実践でわかったこと」では、やって差し上げる介護ではなく、待つ支援であることが再度、強調されています。痴呆老人のケアにかかわる看護・介護職であれば、宮崎さんたちのいう「見極める力量を持ち、手を出さないで待てる支援」の大切さを実感しているでしょうが、それを実践するためには、ただならぬ忍耐と高い専門性を要することもご存知でしょう。本書を読むと、それが可能になりやすい環境の1つがグループホームなのだとわかります。

“福さん家”のケアは宮崎さんと素晴らしい職員の方々と、入居者さんを取り巻く地域あつてのものではあるけれど、全国に2000か所を超えたといわれるグループホームのすべてが痴呆老人にとって本当に良い場であって欲しいと思います。そのため、グループホームに、志ある優れた職員が配置されることが強く望まれます。痴呆老人にかかわる多くの方に、とても読みやすく面白くて元気の出る本書をぜひお勧めします。